

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 7 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21710250

研究課題名（和文） ポスト公民権運動期の米国における公共交通網の形成と異人種・階級間関係の変化の研究

研究課題名（英文） The Making of Atlanta's Public Transit and the "Atlanta Paradox" in the Late 20th Century

研究代表者

宮田 伊知郎 (MIYATA ICHIRO)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号：80451730

研究成果の概要（和文）：

ジョージア州アトランタにおける公共交通機関アトランタ大都市圏快速交通公社 (Metropolitan Atlanta Rapid Transit Authority) の形成過程に注目し、その設立がいかによりアトランタ大都市圏に住む人種・階級・ジェンダーを異にしたあらゆる集団間関係の変化を示すものであったのかを調べた。自動車社会のアメリカにおいて、公共交通網（電車とバス）を設置することが、社会的公正の面においていかなる意味を持ったのかを同時に問うた。法的な人種隔離の撤廃、公民権法また投票権法の制定など、公民権運動が「一定の成果」を上げるなか、「偉大な社会」プログラムの一環として実現した公共交通網の整備であったが、それはそもそも様々な格差の解消につながるものではなかったことを具体的に示した。その際、為政者や都市計画家のみならず家事労働者組合や園芸クラブ、住宅所有者の会メンバーなど市井の人々が残した史料を題材として使用した。

研究成果の概要（英文）：

This project is an attempt to show how in the 1960s and 1970s the privileged and the underprivileged tried to use urban development projects to build fairer relationships in post-war Atlanta. By looking at how such groups as affluent white homeowners, African-American domestic workers, environmentalists, and student activists supported public transit plan in the 1971 referendum, this project sheds light on how they overcame their differences to produce a consensus in support of the plan, yet how that same compromise also bore the origins of future conflict in the form of racial and class fissures. This later discord arose because each group, but particularly the privileged, understood the term "public" on their own terms and used it as a way to preserve their vested interests. Thus, this project contends that, despite its current reputation as a global city, Atlanta remains divided.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：2601 地域研究

キーワード：アメリカ史、都市史、アメリカ研究

1. 研究開始当初の背景

マイノリティに焦点をあてた「新しい社会史」の隆盛が一定の成果をあげるなか、アメリカ史の細分化が批判されるようになった。1990年代には、社会の「中心」に位置する人々を歴史学の対象として考察することが求められるようになった。そのため、白人中産階級の郊外研究が盛んになった。1980年代に顕在化し、21世紀に入り急成長した新しい保守主義を支えたのが、成長著しいサンベルト地帯の都市郊外地域だったことも、そうした郊外研究の進展を後押しした。郊外にどのような人が住み、どのような政治文化を構築したのか。その歴史学的な意味は何だったのか。これらを問う「中心」に位置する人々の社会史研究は目覚ましい速度で発展しており、そうした業績に触れるにつれ、またそうした分析のなかに現代日本の政治状況との類似点も見られるがゆえに、そもそも豊かであるとは、保守であるとは何か問うようになった。

2. 研究の目的

郊外住民がどのように郊外以外に住んでいる人々と関係を築いたのか、ないしは、かれらが他者とのかかわりのなかにどう自己アイデンティティを構築したのか分析するアメリカ現代史の実証研究には、発展の余地があった。ゆえに本プロジェクトはアトランタの郊外と都市中心部をつなぐ公共交通網の形成プロセスに注目し、郊外社会史研究の間隙をつくことを試みた。1965年に設立され、1971年に計画の実行が決定したMARTAは、郊外と都市の別を解消する「公共」の交通網として計画された。都市と郊外の間隔を探るにはしたがって格好の題材であった。たちあげから計画案の承認まで人種・階級・ジェンダーを異にするあらゆる社会集団が公共交通網の形成をめぐるどう結びつき、離れていったのかを歴史学的に分析することを目指した。

3. 研究の方法

「普通」の人々がどのように公共交通網の形成に対して声を上げたのか調べるために、新聞やセンサスなどの統計史料のみならず、住宅所有者の会や黒人家事労働者、園芸クラブなどの組織の声明やメモランダム、会議議事録など日常生活のありさまを映し出す文書館史料を分析した。具体的にはジョージア州アトランタのエモリー大学のMARBL(Manuscript, Archives, & Rare Book Library, Emory University)およびジョージア

州立大学のアメリカ南部における労働に関する文書館(Southern Labor Archives, Georgia State University)、アトランタ・ヒストリー・センターのケナン・リサーチ・センター(Kennan Research Center, Atlanta History Center)同じくジョージア州アセンズのジョージア大学リチャード・ラッセル文書館ならびにウォルター・J・ブラウン・メディア文書館(Richard B. Russell Library for Political Research and Studies and Walter J. Brown Media Archives, University of Georgia)を中心に渉猟した一次史料の解釈に努めた。

分析の効率化のためにデジタル技術を活用した。例えば、60年代や70年代のアトランタ社会を考察する際に欠かすことができないのはテレビ情報である。ジョージア大学のウォルター・J・ブラウン・メディア文書館では、過去のアトランタにおけるニュース番組がVHSテープで保存されている。本プロジェクトに関連する放送をデジタル音声化し持ち帰ったものを、文字に起こし史料として使用した。また、先に述べた文書館で入手した書簡やメモランダムに関しても、OCR等を用いデジタル化することによって、効率的な史料活用を行う体制を整えた。さらに、アトランタでは近隣ごとにローカル紙が充実していたが、そうした史料をオンラインで取引交渉することによりマイクロフィルム化し購入することもできた。

さらに人口統計データを統計区(tracts)までにさかのぼり収集してきたが、これらを地図化し示し、分析結果の可視化を目指した。ESRI ジャパン社のGIS地図ソフトを購入し、その利用方法を学んだ。使用技術を習得する余地はまだあるとはいえ、人口統計等を視覚化し、よりわかりやすいかたちで成果を公開する環境を整えることができた。このように研究の方法に関しては、旧来の足を使った実証活動をデジタル技術など新たな技術を使うことにより発展させることに成功したといえる。この蓄積は、今後の研究の真土と間違いないであろう。

4. 研究成果

郊外のとりわけ郡部に住む白人中産階級、都市の中心部近くに住む邸宅地住民、インナーシティに暮らす黒人家事労働者などそれぞれの集団が、公共交通網の案を支持するなかでそれぞれの「公共」観を構築していたことがわかった。住民投票で公共交通網の形成は差異を超えた目的として承認されたが、「公共」の解釈自体が異なっていたので、承

認自体が分裂の種をはらんでおり、よってそれぞれの目的は叶えられず、交通網形成の目的であった格差の解消であるとか、交通問題の解決に至ることはなかったことを示した。

具体的には、郊外郡、高級住宅地、いわゆる「インナーシティ」、ないしはアトランタから離れた農村部などの定点としながら、それぞれの住民がどのように、州憲法の改正を要し、連邦政府からの巨額の援助（＝統制）をもたらす公共交通機関の形成案や路線建設計画に対応したかを明らかにした。

「公共」をめぐる分裂とは例えば次のように説明することができる。白人高級住宅地の住民は MARTA を自分の近隣を切り裂く高速道路建設案に対抗する術として、一方で家事労働者達に代表される貧困層（とりわけ黒人）は、それを通勤や消費活動などのための移動手段として考え支持した。かれらは MARTA を承認するという意味において公共交通を支持したものの、「公共」という概念に込める意義は異なった。路線計画の策定と建設などの展開においては、利用を前提とした公共交通の充実を求めた生活困窮者層の声が十分に生かされない開発が進んだ。最も貧しい人々が住むエリアにも交通サービスが届くことがなかった。一方で豊かな中産階級の住む郊外にも路線が届くことはなく、白人のかれらが公共交通を利用することはなかった。貧困層に利用がほぼ限定される公共交通機関は、連邦政府による過剰投資ないしは無駄として認識され、こうした観念自体が「小さな政府」を支持する層の成長に貢献した。あらゆる人々のさまざまな公共観を引き受けたが故に機能不全に陥った公共交通網は、リベラル政策の失敗の象徴となった。さらに、公共交通への否定的な観念は、黒人貧困層に対する人種差別主義と結びつきながら強まっていった。つまり、公共交通の整備時代が、社会的公正を叶えられない社会を皮肉にも再生産しているのである。

研究機関における具体的な成果として挙げられるのは、2010年12月にジョージア大学に博士論文"Setting Atlanta in Motion": The Making and Unmaking of Atlanta's "Public" Transit, 1952-1981," Ph.D. diss., University of Georgia を提出し受理されたことである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 宮田伊知郎、「ポスト公民権運動期のジョージア州アトランタにおける公共交通網の形成と貧困の継承」『歴史学研究』第888号(2012): 13-23頁。(査読無)

2. 宮田伊知郎、「防げたはずの悪夢－住宅市場における人種差別と『サブプライム・メルトダウン』」『歴史学研究』第851号(2009): 37-47頁。(査読無)

3. 宮田伊知郎、"Just as Important as Getting to the Moon": The Emergence of the Idea of Rapid Transit in Atlanta, Georgia, 1952-1961" 『埼玉大学教養学部 埼玉大学紀要、教養学部』45(2009):209-229頁。(査読無)

[学会発表] (計1件)

1. 宮田伊知郎、「アトランタにおける都市開発と『公共』概念の分裂、1952-1981 ビジネス・エリート、白人ミドルクラスおよび黒人コミュニティの声の分析を通して」、アメリカ南部史研究会、共立女子大学神田一橋キャンパス、2009年6月28日。

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

Ichiro Miyata, "Setting Atlanta in Motion": The Making and Unmaking of Atlanta's "Public" Transit, 1952-1981," Ph.D. diss., University of Georgia, 2010.

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮田 伊知郎 (MIYATA ICHIRO)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号：80451730

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：